

新編

大村市史

第一卷

原始編

第一節 旧石器時代概説

旧石器時代とは、人類の誕生から約一万一〇〇〇年前の第四紀更新世に当たる考古学での時代区分である。バーキットの定義にならえば打ち欠いて作った石器(打製石器)を使用した時代である①。近年の研究によれば、現在、地球上に生存するすべての人は、日本人であれ、アメリカ人であれ、二〇万年前アフリカにいた一人の女性を先祖とするといわれている(ミトコンドリアーイブ仮説)。現生人類のホモ・サピエンスは二〇万年前のアフリカに出現し、その後一〇万年前にアフリカを出発(出アフリカ)してヨーロッパ・アジア・南北アメリカと全世界へ拡散した。日本列島に到達したのは四万年前後と推測されている②。

旧石器時代は、寒冷な気候と温暖な気候が繰り返かえした。寒冷な時期を氷河期といい、最終氷期最寒冷期はおよそ二万年前から一万八〇〇〇年前頃で、平均気温は現在よりおよそ七度も低かったという。そのため海水は陸地に閉じこめられ、海面は最大で二二〇メートル程も下がった。九州と朝鮮半島が陸続き(陸橋)となったといわれたこともあるが、対馬海峡西水道の最も深いところは水深二五〇メートル程あり、最終氷期では「陸橋」は形成されなかった。当時、朝鮮半島と古本州島(本州、四国、九州は陸続きであった)との間は幅一〇数キロメートルの水路のような環境であった

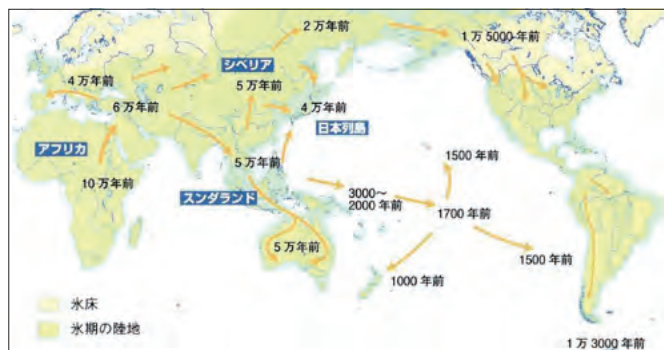


図1-1 ホモ・サピエンスの拡散 (河出書房新社「列島の考古学—旧石器時代」より)

らしい。「陸橋」が形成されたのは、最終氷期より前の約一二万年前の氷期のときで、そのとき、ナウマンゾウ・オオツノジカ・シカ・イノシシなどの黄土動物群が西日本へ渡ってきたとされる(3)。

当時の西北九州には、マツ属・ツガ属・クルミ属・ハンノキ属・ブナ属など冷温帯落葉広葉樹林が広がっていたことが、平戸市堤西牟田遺跡の花粉分析によって確認されている。旧石器時代人は、冷温帯の森でシカなどを追いかけて、チョウセンゴヨウ・クルミなどを採集する遊動生活をおくっていたものと思われる。

一 日本における旧石器時代人

旧石器文化の担い手である人たちの骨は日本本土ではほとんどみられない。かつては日本本土でも旧石器時代の人骨とされるものが多く報告されていたが、今日それらの多くは否定され、確実に旧石器時代人と認定される例は、静岡県浜北人骨だけである。

そのなかにあつて旧石器時代の人骨が集中的に出土しているのが沖縄県である。昭和四十五年(一九七〇)に発見された港川人は、石灰岩の割れ目から出土した二万年前の人骨で、ほぼ全身骨格が揃つており、身長一五三センチメートル、脳容積は現代人よりやや小さく一三三五ミリリットルである。このほか敲石や礫器とともに出土したとされる山下町人や近年発掘され話題と



写真1-1 港川人(堤隆『列島の考古学—旧石器時代—』より
京大総合研究博物館所蔵)

なつた石垣島の白保竿根田原洞穴人などが知られている。しかし沖縄県の状況は、九州地方の旧石器文化とは趣を異にしているようでナイフ形石器など後期旧石器時代の典型的な石器は出土しておらず、また開地遺跡が認められていないところも不思議なところである。

なぜ日本本土では人骨の出土がみられないのだろうか。その要因としては、旧石器時代の遺跡のほとんどが酸性土壌に包含されているため有機物が残らないことである。本土で人骨が出るとすれば、有機物の遺存に適した石灰岩地帯の洞穴遺跡などにその可能性があり、調査の進展が期待される。

◆ 長崎県の旧石器時代

■ 一・長崎県の旧石器時代遺跡

「岩宿の発見」によってスタートした日本の旧石器研究の進展には目を見張るものがある。日本の旧石器時代の遺跡は、北は北海道から南は沖縄まで全国に及び、その数は一万を優に超え、世界に冠たる旧石器王国の態をなしている。

長崎県は、日本でも有数の旧石器遺跡の密集地帯である。日本旧石器学会編『日本列島の旧石器時代遺跡』によると県内の旧石器時代の遺跡は六五二カ所（文化層・地点を含む）を数える。その内訳をみると、旧石器時代の遺跡が五二九箇所あり、一〇平方キロメートルあたりの遺跡数は一・三遺跡となり全国平均の約五倍となり、都道府県単位では第六位である。時期別では、ナイフ形石器文化以前の遺跡は極めて少なく僅か六遺跡に過ぎない。ナイフ形石器や台形石器などが出土した遺跡が最も多く、三二二三カ所にのぼる。また縄文時代草創期の遺跡は、一三七遺跡で全国第五位の遺跡密度を誇る。

■ 二・長崎県の旧石器編年

旧石器時代の編年は大きくナイフ形石器文化以前（Ⅰ期）、ナイフ形石器文化（Ⅱ期）及び細石器文化（Ⅲ期）の三時期に区分される。

長崎県でⅠ期に該当し、最も古く位置づけられるのは佐世保市吉井町福井洞穴第一五層出土の石器群である。放射性炭素年代測定によると三万一九〇〇年よりも古いという。この数値は当時の測定能力を超えるものであった。しかし発掘面積も狭く、出土した遺物も定型的なものには楕円形石器一点のみであり、石器群の詳細はよく分かっていない。近年、駐車場整備に係る調査や佐世保市による範囲確認調査で、後期旧石器時代や縄文時代の石器にはみられない石器が明らかに

なった。石器表面の風化が進んでおり、福井洞穴第一五層のそれと同様であった。最近の調査では、福井洞穴にほど近い佐世保市直谷岩陰五層でも福井洞穴一五層に類似する玄武岩製の石器が出土しており、四万年前という測定結果が得られている。

Ⅱ期には、長崎県でも遺跡が急増する。この時期の石器群は、ナイフ形石器や台形石器に代表されるもので、平戸市の中山遺跡・堤西牟田遺跡や同市田平町日ノ岳遺跡などからは、石器だけではなく炉跡などの遺構が検出されている。また堤西牟田遺跡や諫早市西輪久道遺跡・雲仙市百花台遺跡などでは複数の石器群が層位的に発掘され、編年研究の枠組みがつくられた。

この時期の編年は、大きく四期に区分される。

Ⅱa期 始良丹沢火山灰(A T)降灰以前

約二万八〇〇年前に噴火した鹿児島県始良火山の降灰物は、A Tと呼ばれ、広く日本全体を覆っており、編年の上で鍵層となっている(4)。南九州では壊滅的な被害があったことが想定され、石器群の内容に大きな変化があったとされる。西北九州ではA Tの堆積は薄く、南九州ほどの被害があったとは考えられない。石器群の変遷も漸次的であるが、A Tの下位に包含される石器群をⅡa期と位置づける。この時期の前半は台形様石器を主体とし、後半にはナイフ形石器を主体とする石器群がくる。県内では日ノ岳遺跡Ⅲ層、雲仙市国見町龍王遺跡の石器群が代表的である。

Ⅱb期 ナイフ形石器に剥片尖頭器が伴う段階

A T降灰直後の時期で、ナイフ形石器はⅡa期からの連続性を示す。新たな器種として安山岩製の大型剥片尖頭器を組成する。剥片尖頭器は、朝鮮半島との関連を示すとされる大型獣を対象とした刺突具で、A T降灰に伴う環境変化に対応して出現したともいわれている。剥片尖頭器は、安山岩を主な石材とするもので縦長剥片の形状をあまり損ねないように基部に簡単な調整を施し舌状に作り出した石器で、この時期のものには大型品が多い。

Ⅱc期 原の辻型・枝去木型台形石器を伴う段階

ナイフ形石器は、縦長剥片を素材とするいわゆる九州型ナイフ形石器を基本にするが、基部裏面加工を有する柿崎型や剥片の形状を保持する今峠型など複雑な様相を示すようになる。また瀬戸内技法の影響を受けた横長剥片を素材とするナイフ形石器も客体的に組成される。剥片尖頭器は小形化し、素材に黒曜石を使用するものもみられる。台形石器は、元の辻型や枝去木型のように多様化する。元の辻型台形石器は、萩原博文によって型式設定された⑤。刃部に肩を有するのが特徴で左右非対称な平面形をなすもので、初の彦根市原の辻遺跡資料にちなんだ名称である。この時期は、台形石器の型式によって時期の細分が可能であるが、ここでは大きな括りで捉える。

II d期 百花台型台形石器を伴う段階

ナイフ形石器文化の終末期に当たり、ナイフ形石器、台形石器の小形化がみられる。台形石器は百花台型に移行する。この石器は、百花台遺跡IV層出土資料を標式とする。百花台IV層は、カシノミ層と呼ばれる非常に硬く締まった雲仙火山起源の礫石原火砕流が土壌化した層である。この層からは放射性年代測定によって一万八〇〇〇年前と一万四〇〇〇年前という二つの年代が得られており、II d期のおおよその時間幅を想定することができる。百花台型台形石器は、黒曜石の小形剥片を素材とする小形の台形石器で、刃部の両端が

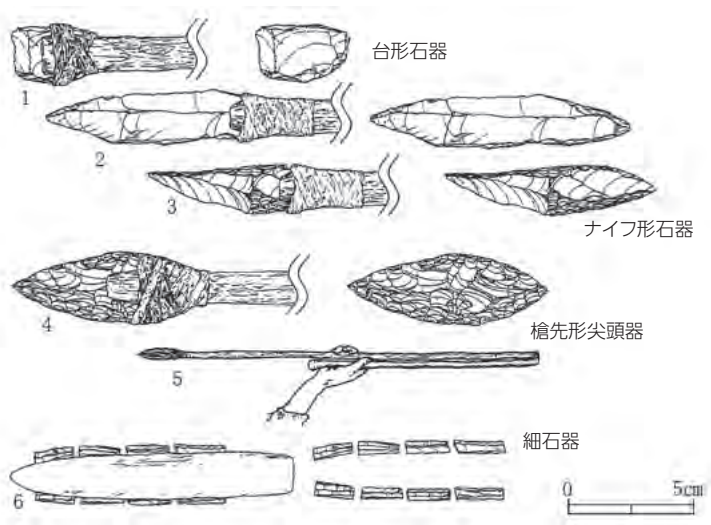


図1-2 石器とその使用法

(安森 (2010) 改変)

角状に突出するという形態的な特徴をもつ。非常に小形であるため組み合わせて用いたことも想定される。長崎・佐賀・福岡の西北九州を中心に分布する。

Ⅲ期は、旧石器時代最終末期で、ナイフ形石器にかわって細石刃というカミソリのような長さ一・五〜三センチ、幅五〜六ミリの極めて小形の細長い石器が登場する。木や骨などの柄に溝を彫り、数個並べてはめこんで使用する組合せ道具である。投げ槍として使用されたと考えられ、部分的に欠けても修復できる合理的な石器であり、石器製作技術の一つの頂点をなすものである。細石刃文化の出自は、ナイフ形石器からの系譜と考える説と大陸からの伝播説の二者がある。

細石刃を剥ぎとる細石刃核は、その形態的特徴から大きく稜柱形を呈する野岳・休場型と、福井型と呼ばれる楔形(舟底形)に二分されるが、九州地方では真正な野岳・休場型を旧石器時代に、福井型は土器出現以降の縄文時代草創期に位置づける編年が共通理解されている(6)。

Ⅲ期は、野岳・休場型細石刃核を指標とするⅢa期と、それに後続する船野型細石刃核をもつⅢb期の二段階に細分する。

Ⅲa期 野岳・休場型細石刃核を指標とする石器群

野岳・休場型は、関東以西の西南日本に広く分布する。鈴木忠司によって、野岳遺跡及び静岡県休場遺跡の資料をもとに型式設定がなされた(7)。ところで野岳遺跡の資料には、稜柱形とともに扁平な細石刃核も認められており、それを含めて野岳・休場型とされていた。扁平な細石刃核は、稜柱形細石刃核の細石刃剥離の進行によって扁平化したものと理解されていたが、研究の進展で、細石刃核の母形(フランク)の段階から扁平を意図したものの存在が明らかになり、二型式に細分された。位牌塔型は、背面に横方向の調整剥離が施されるもので、諫早市位牌塔遺跡出土資料を基準とする。茶園型は、背面が礫面(自然面)で構成されるもので、五島市茶園遺跡V層出土の資料を基準として型式設定された。

この時期を代表する茶園遺跡V層石器群は、野岳・休場型と茶園型・位牌塔型の共伴が確認されるときともに、搔器・削器・楔形石器などを組成するなど内容が充実した石器群である。放射性炭素年代では、一万五四五〇年前という数

値がでている。この年代は西南日本の野岳・休場型細石刃核をもつ石器群のなかで最も古く、Ⅲa期の開始期の年代として重要である(8)。

Ⅲb期 船野型細石刃核を指標とする石器群

船野型細石刃核は、大分・宮崎などの東九州を中心に分布するが、西北九州では散発的な出土にとどまる。厚手の剥片を素材として、剥片の主要剥離面側から下方への周辺調整によって細石刃核を形作り、断面がU字形になる。主要剥離面はそのまま打面として利用され、打面調整はなされない。細石刃剥離作業面は、小口的一端ないし両端に設けられ、短めの細石刃が生産される。東九州では流紋岩・頁岩・チャートなどの石材が用いられるが西北九州では黒曜石が使われる。

県内の代表的な遺跡としては、福井洞穴第四層、長崎市重籠遺跡、西輪久道遺跡などがある。

註

- (1) バークITT著・酒詰伸男訳『旧石器時代』帝塚山大学 一九七四
- (2) 海部陽介『人類がたどってきた道』NHKブックス NHK出版 二〇〇五
- (3) 河村善也『更新世の哺乳類』講座 日本の考古学 1 旧石器時代 上 青木書店 二〇一〇
- (4) 早田 勉『更新世堆積物とテフ』講座 日本の考古学 1 旧石器時代 上 青木書店 二〇一〇
- (5) 萩原博文『原の辻型台形石器について』『人間・遺跡・遺物―わが考古学論集1』麻生 優編 文献出版 一九八三
- (6) 九州旧石器文化研究会『九州の細石器文化』九州旧石器文化研究会 一九九七
- (7) 鈴木忠司『野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化について』『古代文化』三三―八 古代学協会 一九七一
- (8) 川道 寛『日本列島最西端の細石器文化』『地域と文化の考古学』I 明治大学考古学研究室 二〇〇五

第二節 大村湾をめぐる旧石器文化

① 遺跡の分布

旧石器時代は、狩猟採集社会であり、獲物を求めてテリトリー内を遊動していたとされる。この時期の遺跡は、大きく拠点遺跡、キャンプサイトに分けることができる。拠点遺跡は、量的に多くの狩猟具（ナイフ形石器・台形石器）をもち、獲物を解体するのに用いる搔器・削器を装備する。石器製作を遺跡内で行うため石核、敲石をもち、製作によって生じる多くの剝片類が出土する。調理に用いたといわれる礫群や炉跡、炭化物集中など生活の痕跡を示す遺構も検出される①。こうした条件を満たす遺跡としては、西輪久道遺跡、諫早市柿崎遺跡、同鷹野遺跡、同牛込A・B遺跡、東彼杵町松山A遺跡などが該当する。

一方キャンプサイトは、狩猟活動において一時的に居住するもので、遺跡から出土する遺物の量は極めて少ない。多くの場合、狩猟具であるナイフ形石器や台形石器が数点出土する程度であり、石器製作に伴う石核や解体具の搔器・削器類を装備することは少ない。大村湾周辺の遺跡の大部分が、こうしたキャンプサイトの性格を有した遺跡といえよう。

大村湾（旧石器時代には盆地）地域の旧石器時代遺跡の分布②③をみるといくつか遺跡が集中分布することが分かる。大村市内から東彼杵町にかけての大村湾東岸は、標高の高いところに大野原高原のような玄武岩台地が展開しており、湧水地・溜池の付近を中心に遺跡群が広がる。しかしほとんど開発の手が伸びておらず、昭和三十六年（一九六一）日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会による東彼杵町の遠目遺跡で小規模な確認調査が行われたに過ぎず、石器群の内容は未解明である。一方、大村市の中心部に広がる大村扇状地は、洪積世扇状地であるが、現在のところ旧石器時代の遺跡は検出されていない。しかし富の原遺跡ではAT火山灰の堆積が確認されており、条件のいい地点があれば市内中心部においても旧石器時代の遺跡が確認される可能性もある。

大村市内から東彼杵町を南北に縦貫する九州横断自動車道の建設に伴って多くの遺跡が発掘されているが、ほとんどの

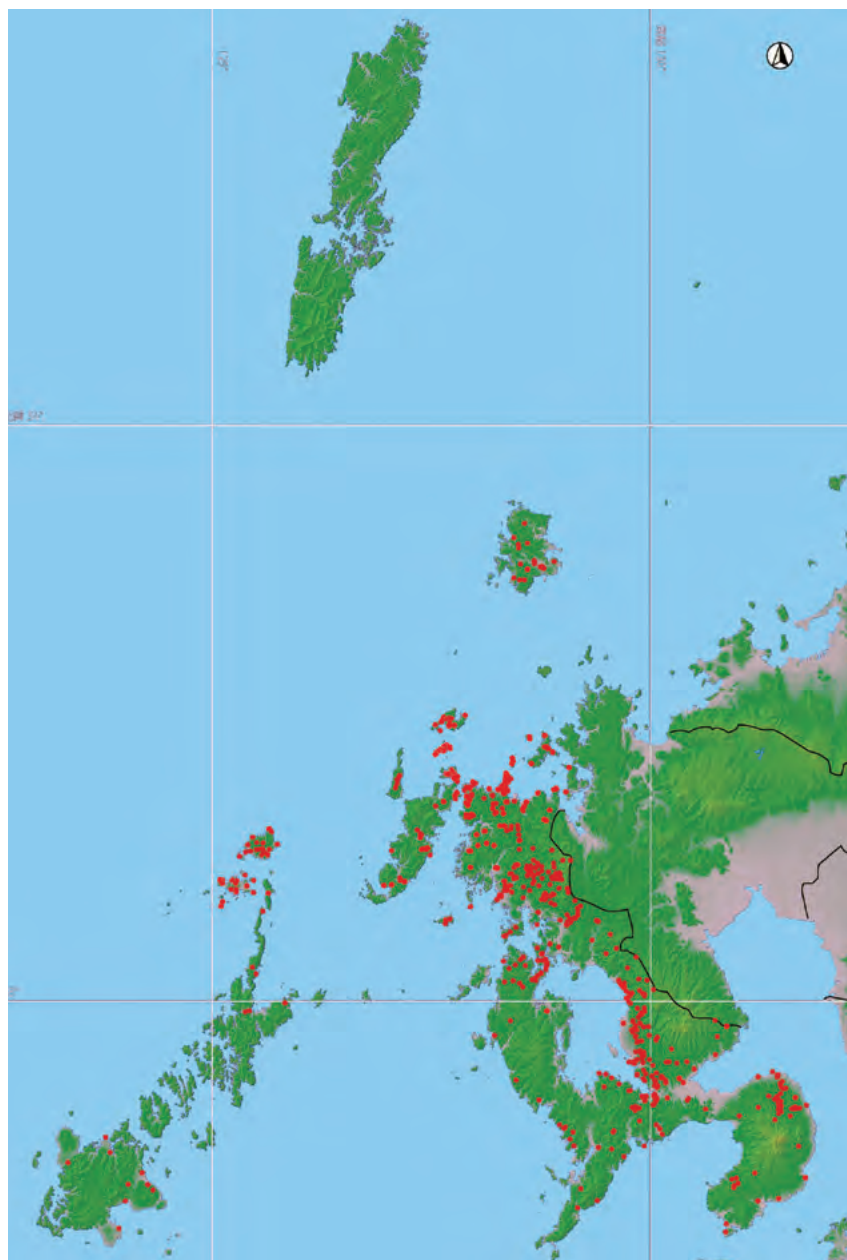


图1-3 長崎県旧石器時代遺跡分布

(日本旧石器学会編(2010) 改変)

遺跡が多良岳から西に延びる丘陵の端部に位置しており、土層の堆積環境が劣悪なため包含層をもたず、遺物が原位置を遊離した状態である。この部分の分布を見ると高速道路の路線と見事に一致する。遺跡分布について考える場合にはそうした事情も考慮する必要がある。

大村湾南岸で遺跡が集中するのは、大村湾の最奥部の津水湾に面した諫早市の貝津地区である。九州横断自動車道の諫早インターチェンジ及び中核工業団地造成という大規模開発事業に伴う発掘調査が一九七〇年代に集中的に行われ、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が次々に調査され、大きな成果をあげた。この地域の地形は、溶岩円頂丘（トロイデ火山）である井樋ノ尾岳（標高四〇七メートル）、八天岳（二九七メートル）などの麓に標高五メートル〜三〇メートルの低平な丘陵が展開しており、遺跡はその丘陵に立地している。地質学的には第三紀の砂岩層である。この丘陵を開析する西大川は碁盤ノ辻に源を発する全長三・三キロメートルの小河川である。この川沿いの丘陵に鷹野遺跡、柿崎遺跡など数多くの遺跡が集中する。西彼杵半島の北端から針尾島にも遺跡の集中が見られる。この地域には、玄武岩台地が広がっており、その風化土層の中に遺物が含まれていることが多く、みかん栽培等によつて開墾されたため地表面に遺物が露出していることが多い。あわせてこの地域は、日本でも有数の黒曜石の原産地でもある。一方、半島の中央部には西彼杵変成岩帯と呼ばれる古生代の層が広がっており、この変成岩が露出する地域では旧石器の存在が確認されていない。

二 大村湾東岸のナイフ形石器文化

この地域ではほとんどの遺跡が良好な包含層をもたず、石器群として捉えることができない。そのため個々の石器の形式的特徴からナイフ形石器文化の概要をみていく。

迫ノ山遺跡は、今村町蓮蔵寺に所在し、標高四〇メートル前後の丘陵鞍部に立地する。層位は攪乱されており包含層は存在しない。幅広の分厚い剥片を素材とする台形石器（[図1-6-5](#)）が一点出土している。両側縁に急傾斜の細調整（フランティング・刃潰し加工）が施される。風化が進んでおりパティナ（古色）が著しい。

針尾遺跡は、岩松町のJ.R.岩松駅近くの丘陵に位置する。標高は四五メートルあまり、包含層は存在しない。台形石器(図1-6の4)が一点出土している。

石原遺跡は、向木場町に所在し、標高六〇メートルの丘陵尾根部に立地する。切出状を呈するナイフ形石器(図1-5の1)が一点出土している。

東平遺跡は、木場二丁目東平に所在し、標高六〇メートル前後の丘陵に立地する。不定形な横長剥片を素材とするナイフ形石器が一点と台形石器(図1-5の3)が一点出土している。いずれの石器も腰岳・牟田系黒曜石を素材としている。

上長尾遺跡は、木場二丁目上長尾に所在し、標高九〇メートル前後の丘陵に立地する。ナイフ形石器が二点出土している。図1-5の2は、薄手の幅広な縦長剥片を素材とする。主要剥離面側から丁寧な細調整剥離が施されている。図1-5の3は、薄手の縦長剥片を素材とする。細調整は右側縁に限定されている。石材には古里系の乳白色黒曜石が用いられている。

上水計遺跡は、水計町上水計に所在し、標高七〇メートル前後の丘陵に立地する。ナイフ形石器(図1-5の4)が一点、台形石器三点が出土している。ナイフ形石器は、大形で薄手の良質な縦長剥片を素材とし、打瘤を除去するように細調整が施されている。基部裏面には弱いながらも調整剥離がみられる。石材は良質な腰岳・牟田系黒曜石が用いられている。台形石器(図1-6の4~6)は三点いずれも百花台型で、小形の剥片を素材とし、刃部の両端が突出している。いずれも腰岳・牟田系黒曜石が用いられている。編年的には、II d期に該当する。

嶽ノ下A遺跡・嶽ノ下B遺跡は、池田1・2丁目に所在し、標高四〇メートル前後の丘陵に立地する。ナイフ形石器の破片が一点と台形石器(図1-6の6~8・17)が四点出土している。6~8は枝去木型である。いずれも平坦剥離に近い調整加工が裏裏両面に施されている。素材は、6が淀姫系、7・8には腰岳・牟田系黒曜石が用いられている。17は百花台型である。上水計遺跡のものと極めて似ており、刃部の角状突出も顕著である。腰岳・牟田系黒曜石を素材とする。II c期からII d期にかけての時期の石器群と推測される。

野田古墳は、標高六〇~七〇メートルほどの丘陵の西端にある古墳群である。大形のナイフ形石器(図1-5の19)が一点出土して

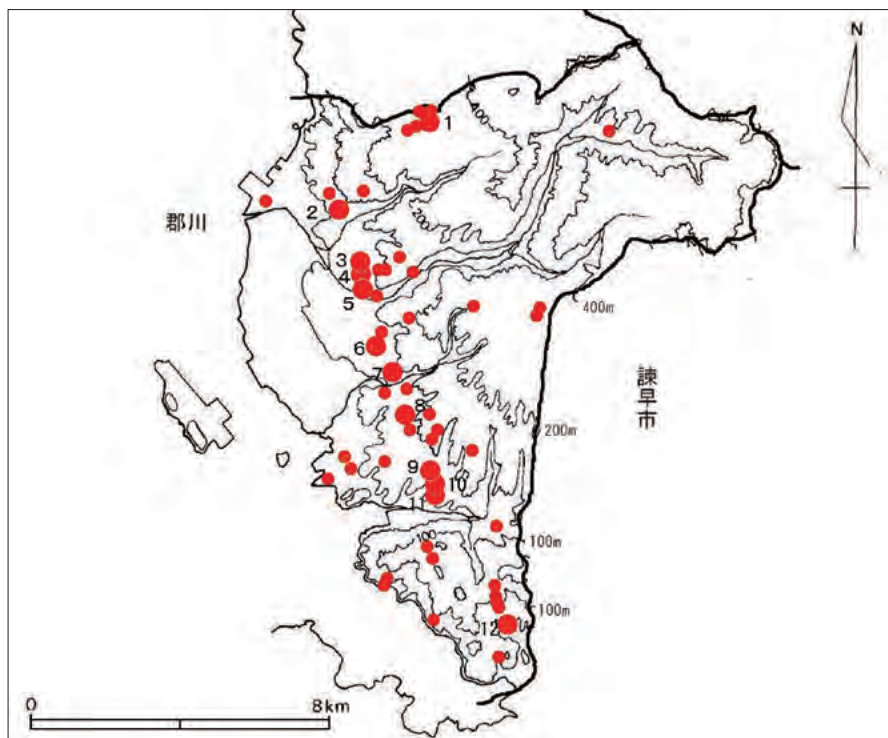


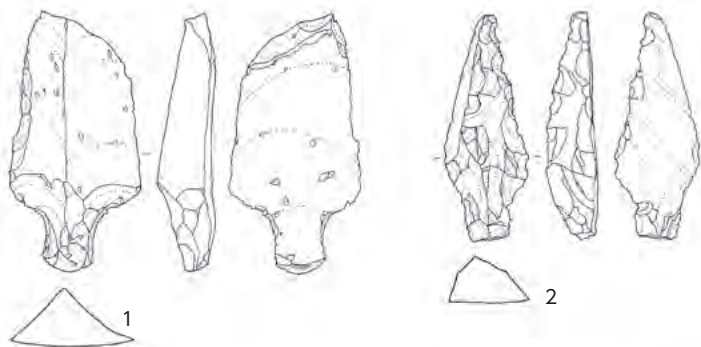
図1-4 大村市内の旧石器遺跡分布図

表1-1 大村市内の主な旧石器遺跡一覧表

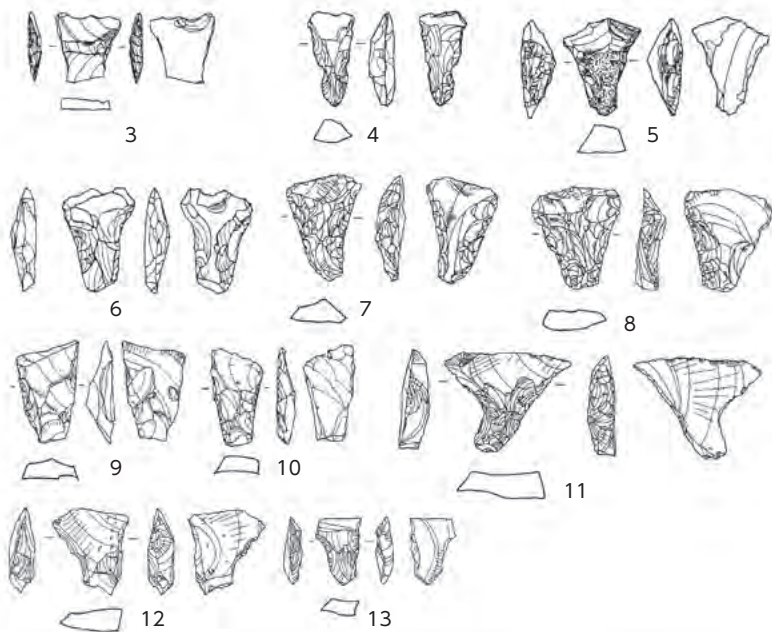
地図	遺跡名	所在地	標高 (m)	ナイフ形石器	台形石器	剥片尖頭器	角錐状石器	細石器
1	野岳遺跡	東野岳町	270	○				○
2	野田の久保遺跡	弥勒寺町	40	○	○		○	
3	野田古墳	野田町	60~70	○	○			
4	野田A遺跡	鬼橋町野田	60~70	○				○
5	葛城遺跡	荒瀬町	50	○	○			○
6	嶽ノ下A・B遺跡	池田1・2丁目嶽ノ下	40		○			
7	上水計遺跡	水計町上水計	70	○	○			○
8	上長尾遺跡	木場2丁目長尾	90	○				
9	針尾遺跡	岩松町	45					
10	東平遺跡	木場2丁目東平	60					
11	石原遺跡	向木場町	60	○				○
12	追ノ山遺跡	今村町追ノ山	40		○			



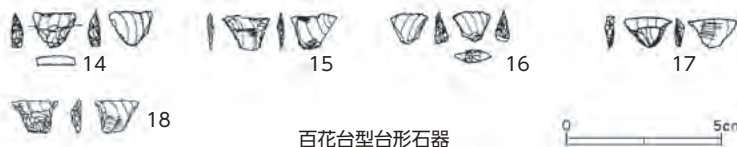
図1-5 大村市内出土のナイフ形石器



剥片尖頭器・角錐状石器



台形石器



百花台型台形石器

図1-6 大村市内出土の剥片尖頭器・角錐状石器・台形石器

いる。包含層からの出土ではない。腰岳・牟田系の漆黒色黒曜石を素材としており、先端部が欠損している。二側縁加工で細調整後、表裏両面に平坦剝離を施す。基部裏面加工のあり方から柿崎型と思われる。

葛城遺跡は、市のほぼ中央、荒瀬町に位置する。標高五〇メートル前後の丘陵の西端に立地する。調査面積が広かったため多くのナイフ形石器・台形石器が出土している。二側縁加工の柳葉形を呈するナイフ形石器(図1-5の11・12)は二点ある。11は良質な縦長剥片の左側縁先端部と右側縁基部側に細調整が施され、基部裏面にも僅かな調整がみられる。素材は淀姫系黒曜石である。13は小形である。縦長剥片の両側縁に丁寧な細調整が施されている。素材は腰岳・牟田系黒曜石である。切出形を呈するナイフ形石器(図1-5の15・17)は三点みられる。いずれも黒曜石を素材とする。15は小鯛産、16・17は腰岳・牟田系である。今峠型と思われるナイフ形石器(図1-5の14・18)が二点出土している。ともに淀姫系黒曜石を素材とし、幅広い不定形剥片の原形をとどめており、打瘤(バルブ)は除去されていない。15は左側縁に丁寧な細調整が施されているが、18は基部右側縁にわずかな細調整が施されるのみである。台形石器は三点出土している。二点は枝去木型であり、いずれも腰岳・牟田系の黒曜石を素材とする。調整剝離は平坦剝離で、表裏両面に施される。百花台型のものとは小形で、刃部が百花台型の特徴である角状に突出する。腰岳・牟田系の良質の石材を素材とする。本石器群は、多種類のナイフ形石器、台形石器を含むことからIIc期からII d期にかけての時期が想定される。

野田A遺跡は、鬼橋町に所在し、標高六〇〜七〇メートルほどの台地の南斜面に広がる。ナイフ形石器(図1-5の5・8)が九点、台形石器(図1-6の9・10)が二点出土している。ナイフ形石器のほとんどは二側縁加工で柳葉形のものである。良質な縦長剥片を素材とする。基部裏面加工の柿崎型が二点みられる。いずれも腰岳・牟田系の黒曜石が用いられている。切出状のナイフ形石器は、不定形剥片を素材としており、表面に一部礫面を保持している。石材には淀姫系黒曜石が選択されている。台形石器は、刃部が斜刃になるのが特徴で、一点(図1-6の9)は、幅広剥片を素材とし、左側縁に急斜な細調整加工が施され、右側縁は折断で調整は認められない。主要剝離面に厚みを減じるための平坦剝離が施されている。石材は腰岳・牟田系黒曜石である。他の一点(図1-6の10)も幅広の不定形剥片を使用している。両側縁に大振りの調整剝離が施されるが、主要剝

離面の調整は認められない。石材は淀姫系黒曜石である。

野田の久保遺跡は、弥勒寺町に所在し、標高四〇メートルの丘陵の尾根部に立地する。ナイフ形石器二点、剥片尖頭器一点、角錐状石器二点、台形石器三点が出土している。包含層はなく、いずれも表採若しくは攪乱層からの出土である。ナイフ形石器は、いずれも小形で細身の柳葉形を呈する二側縁加工のものである。図1-6の21は淀姫系黒曜石、22は腰岳・牟田系黒曜石を素材とする。剥片尖頭器(図1-6の1)は、大形で先端部が折断欠損する。茎部を丁寧に作り出している。素材には、安山岩の縦長剥片が用いられている。角錐状石器(図1-6の2)も厚手の安山岩製の縦長剥片を素材としている。台形石器は、大きさの大小、形状の相違はあるが三点とも原の辻型とみられる。いずれも腰岳・牟田系黒曜石を素材としている。図1-6の11・12は原の辻型の特徴である刃部に肩をもたないが片側縁に大きく抉るような調整剝離が施され、左右非対称となる。ことから原の辻型の一員とした。図1-6の13は、小形の刃部に肩部を有する典型的な原の辻型である。IIb期からIIc期にかけての時期と推測される。この地域では古期の石器群を含んでいる。

大村市北部に位置する東彼杵町にもいくつかの遺跡が存在する。遠目遺跡は、佐賀県との県境を接する標高五〇〇メートルの大野原高原に所在する。ナイフ形石器は、地山に貼りつくような出土状態であったと報告されている。小形の側縁加工のナイフ形石器、切出状を呈するナイフ形石器が出土している。いずれも黒色の黒曜石が用いられていることから素材となる黒曜石は腰岳・牟田系と推測される。学史的には意義深い遺跡で、短報が日本旧石器文化研究の初期段階の集大成とされる河出書房新社『日本の考古学Ⅰ 先石器時代』(一九六五)に記載されている。同書には、井手寿謙の採集したカブラ堤及び千綿で採集されたナイフ形石器・台形石器も図示されている。

松山A遺跡は、大村湾に面した東彼杵町彼杵宿郷の大村湾を見下ろす丘陵の西端にあり、標高六〇〇〜七〇〇メートルほどの南斜面に立地する。七〇点を超える大量のナイフ形石器が出土している。大形〜小形の二側縁加工のもの(図1-7の3・5・7)や切出状を呈するもの(図1-7の6)のほか今峠型(図1-7の2)も出土している。大形の角錐状石器(図1-7の1)が伴っていることや原の辻型台形石器を組成しないことからIIc期にあたる。ナイフ形石器は七七点を数えるが全て黒曜石の縦長剥片を素材と

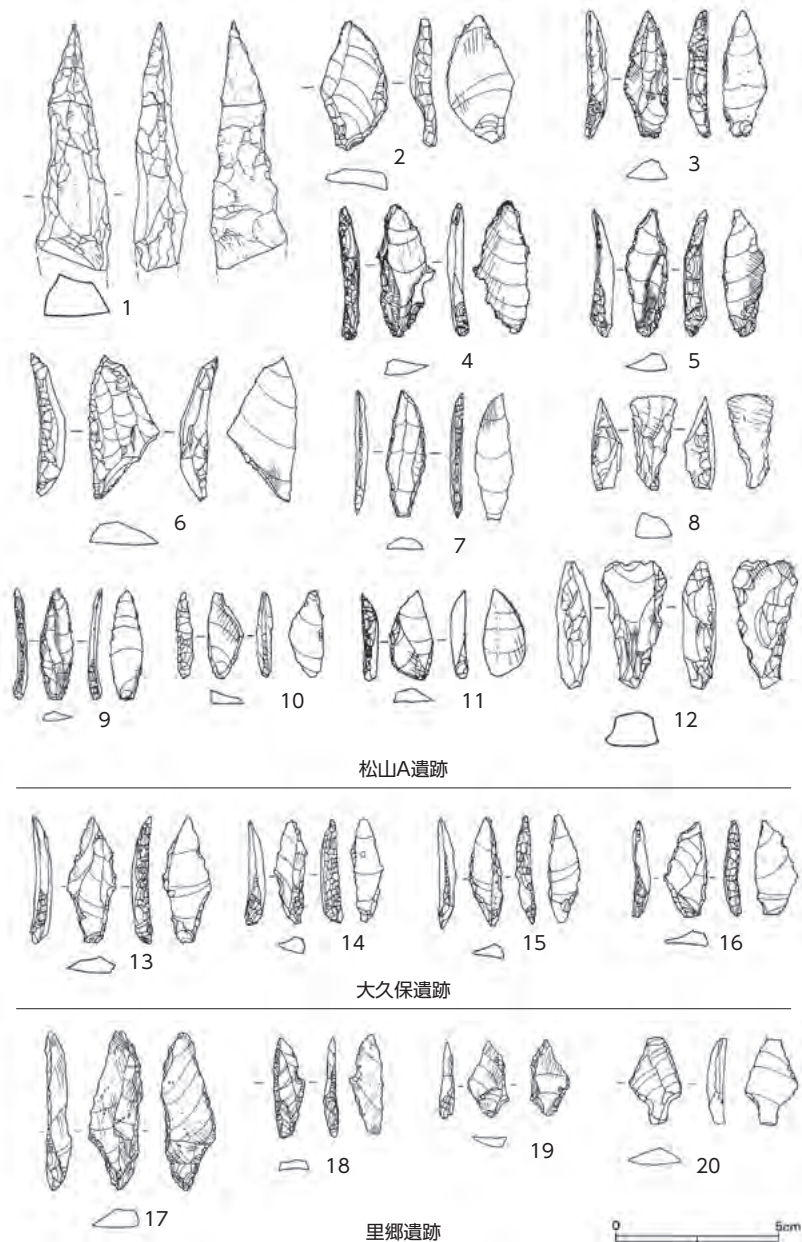


図1-7 大村湾東岸のナイフ形石器文化

している。

大村湾東岸地域ではこのほか、九州横断自動車道建設の調査によつて東彼杵町内の多くの遺跡からナイフ形石器・台形石器などが出土している。

小園城跡からは十数点のナイフ形石器と角錐状石器一点が出土している。ナイフ形石器は縦長剥片を素材とした柳葉形の二側縁加の今峠型がみられる。角錐状石器は横長剥片を素材とする。石材は黒曜石で、腰岳・牟田系と浣姫系がみられるが、前者が量的に多い。石器群の時期は、Ⅱc期に位置づけられる。

大久保遺跡では中・小形のナイフ形石器(図1-7の13、16)が二点出土している。多くは小形で柳葉形を呈し、縦長剥片を素材とした二側縁加工のもので、基部裏面加工は施されていない。切出状を呈するものもある。使用されている石材は全て黒曜石である。漆黒色の良質な腰岳・牟田系が大部分を占めるが、青灰色を呈する浣姫系や乳白色に縞模様に入る小鯛産も認められる。石器群の時期は、Ⅱc期に位置づけられる。

里郷遺跡からは大小のナイフ形石器が数点(図1-7の17・18)、台形石器二点と剥片尖頭器一点(図1-7の20)が出土している。ナイフ形石器は、縦長剥片を素材とするもので、大型・中型の二例はいずれも柿崎型に特徴的な基部裏面加工が施されている。剥片尖頭器は非常に小型のものである。台形石器は、原の辻型と百花台型である。里郷遺跡の石器群の時期は、Ⅱc期からⅡd期に位置づけられる。

三 大村湾南岸の遺跡群

西北九州は、雲仙火山を擁する島原半島を除いて、火山灰の堆積がほとんどみられない地域である。旧石器時代の遺物は、玄武岩の風化土層に含まれる場合が多い。そのため層位の良好な遺跡が検出されることが少ない。多くの場合攪乱を受けており、縄文時代の遺物と混在している。そのなかにあつて西輪久道遺跡では厚い堆積層に恵まれ上下二時期の石器群が検出されている。

西輪久道遺跡は、諫早市津久葉町に所在し、西大川右岸の河岸段丘上に立地し、標高二〇～三〇メートルを測る。西輪久道遺跡下層石器群は、第Ⅵ層～第Ⅶ層を包含層とする。その組成は、ナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器からなる。ナイフ形石器は、切出形に類似する小形のやや幅広になる二側縁加工のもの(図1-8の12～14)で、基部裏面に若干の調整加工が認められる。台形石器は、原の辻型(図1-8の16～19)を主体としている。剥片尖頭器(図1-8の20)は全長九センチメートルを計り、左側縁に大振りの調整加工が、右側縁は基部に細調整加工が施され、基部裏面にはバルブを除去するための調整剝離がみられる。淀姫系黒曜石を素材とする。下層石器群は、ナイフ形石器文化Ⅱc期前葉段階に該当する。

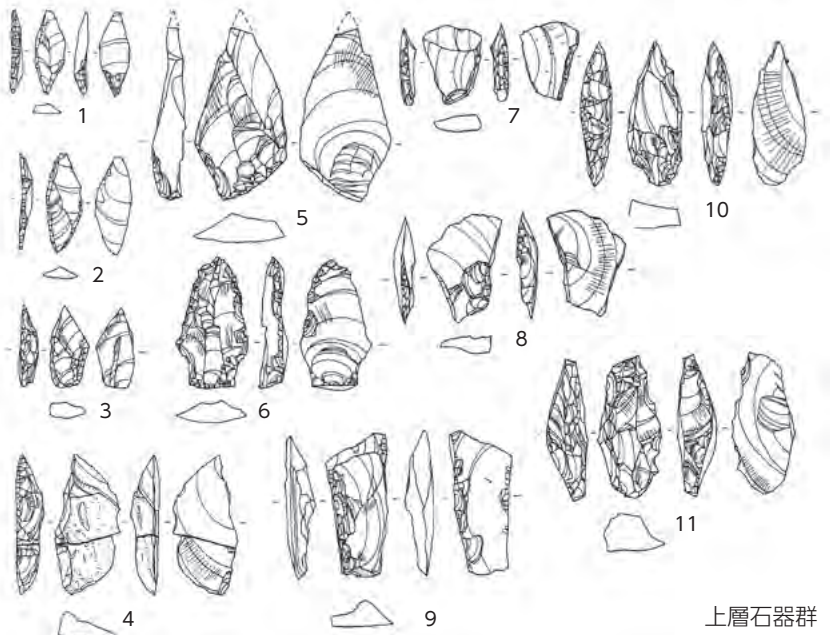
西輪久道遺跡上層石器群は、第Ⅲ層～第Ⅴ層を包含層とする。ナイフ形石器・台形石器・尖頭状石器からなる。ナイフ形石器は、小形の二側縁加工のもの(図1-8の1、2)、切出状のもの(図1-8の3)のほか今峠型ナイフ形石器(図1-8の5、6)が加わる。台形石器は、原の辻型が姿を消し、代わって斜刃を呈する(図1-8の9)ようになる。更に横長剥片を素材とする尖頭状石器(図1-8の10・11)が出現する。この尖頭状石器は、日ノ岳遺跡で採集されてその帰属時期をめぐって注目されていた石器であった。上層石器群は、Ⅱc期後葉段階に位置づけられる。

■柿崎遺跡の石器群

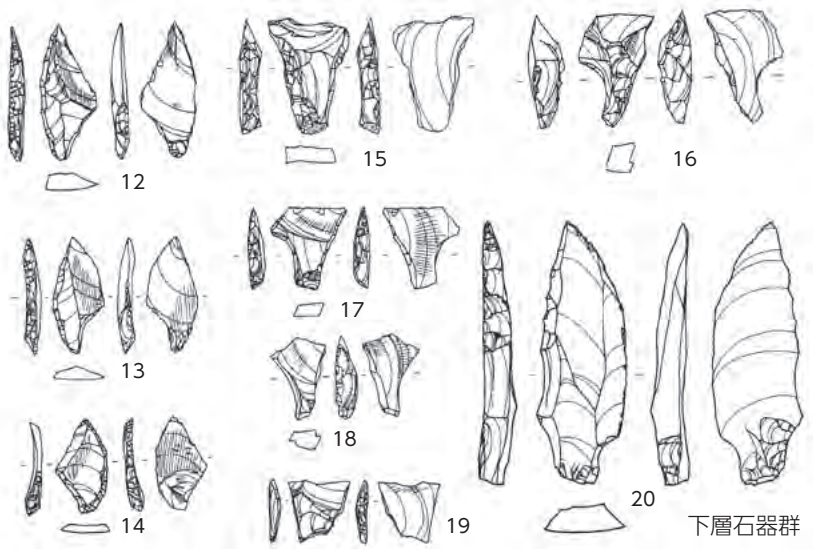
柿崎遺跡は、諫早市貝津町の西大川右岸の低い丘陵の裾部に立地し、標高一五～一七メートルを測る。

石器群の内容は、ナイフ形石器七四点、台形石器五点、搔器三点、彫器三点、石核六点からなる。ナイフ形石器は、四形態に細分されており、その特徴は、二側縁加工で基部裏面に調整を施すもの(図1-9の8～15)が異常に発達することである。これらのナイフ形石器には基部の片方が若干内湾するような細調整加工がみられる。いずれも腰岳・牟田系と思われる良質な黒曜石製の縦長剥片を素材とする。この基部裏面加工のものを柿崎型ナイフ形石器と名づけられている。

台形石器は量的に少ない。原の辻型台形石器(図1-9の18・20)が二点、百花台型(図1-9の21・22)が二点出土しているが、これらが柿崎型ナイフ形石器に伴うものかは判然としない。編年的にはⅡc期とⅡd期の二期に区分できる。図1-9の24はハンマー



上層石器群



下層石器群

図1-8 西輪久道遺跡の石器群

ストーンとストーンリタッチャー両方の機能をもった石器である。石材は不明であるが、棒状の円礫を素材としている。敲打痕や擦痕が全面に残り、一部にタール状の物質が付着している。使用頻度の高い石器であったと推測されている。

接合資料も数点明らかになっている。図1-9の25は分厚い剥片の小口から縦長剥片をとったものである。26はあまり例をみないナイフ形石器同士の接合資料である。

福田一志は、報告の中でブランディングチップに着目してその分析を試みている。この石器は、ナイフ形石器の整形作業（細調整・ブランディング）の際に生じる微細な碎片であるが、当時静岡県寺谷遺跡で報告された程度で全国的にみても先駆的な業績であり、ナイフ形石器の製作過程に迫った独創的な業績である。

このほか湾奥の地域では、西輪久道遺跡・柿崎遺跡と同じ丘陵上に雀ノ倉遺跡・鷹野遺跡・牛込A・B遺跡・平遺跡など豊富な石器群を有する遺跡が数多く存在する。編年的にはいずれもIIc期からII d期とナイフ形石器文化後半段階である。また長与町長与堂崎遺跡でもナイフ形石器・台形石器が出土している。

四 大村湾西岸のナイフ形石器文化

大村湾西岸の西彼杵半島には西彼杵変成岩帯と呼ばれる古生代の層が広がっており、この変成岩が露出する地域では旧石器の存在が確認されていない。半島の北部には玄武岩丘陵が広がっており、旧石器時代の遺跡が集中する。また西彼町亀岳、佐世保市針尾島には黒曜石原産地が存在する。

ケイマンゴロ遺跡は、半島北端の西海市西海町に所在し、標高四五メートルの玄武岩台地に立地する。ナイフ形石器一点、台形石器一点のほか搔器・削器・石核などが出土しているが、縄文時代晩期の遺物と混在している。ナイフ形石器の大部分は、縦長剥片を素材とする二側縁加工のものであるが、横長剥片素材のものもある。台形石器は枝去木型が主体を占める。時期的にはIIc期の後半段階に位置づけられる。

西海市西彼町白似田遺跡では、ナイフ形石器一点、彫器一点、石核一点が報告されている。ナイフ形石器は、一点の

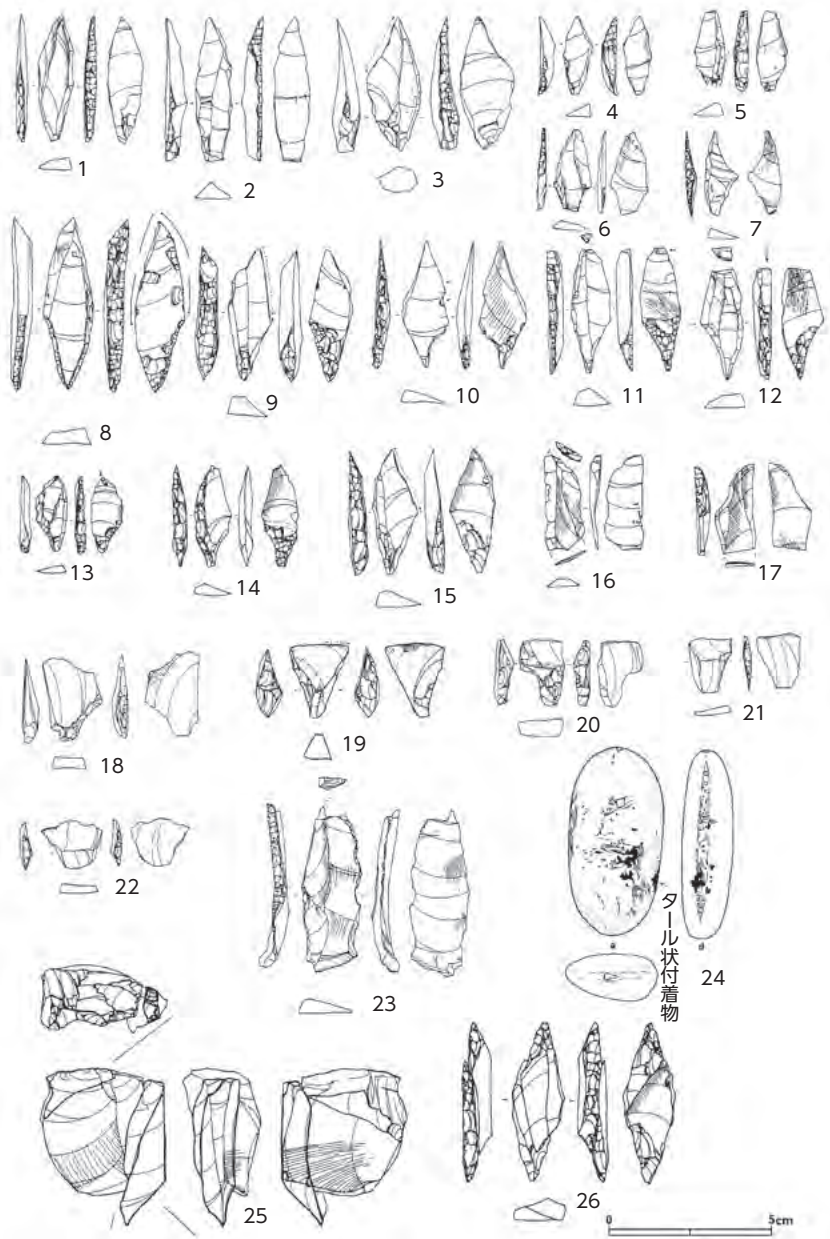


図1-9 柿崎遺跡の石器群

横長剥片素材を除けば、その他はすべて縦長剥片を素材としている。二側縁加工のものが多くが切出状のものもある。基部裏面加工を施したのも二点ある。彫器は大形の縦長剥片を素材とするもので、剥片先端部に三回の加撃によって彫刀面を形成している。いずれも地元の亀岳産の黒曜石が使用されている。石材原産地と直結した遺跡と評価できよう。編年的には横長剥片のナイフ形石器の存在からみてⅡc期に位置づけられる。

西海市大瀬戸町の奉環遺跡は、西彼杵変成右帯に位置しているものの、遺跡周辺にスポット的に玄武岩の風化土層がみられる。範囲確認調査のため小面積だが、その内容は興味深い。厚い包含層を有しており、上下二枚の文化層が予想される。

註

(1) 堤 隆『列島の考古学 旧石器時代』河出書房新社 二〇一一

第三節 大村湾をめぐる細石器文化

旧石器時代の終末、非較正の放射性年代測定でいうと一万五〇〇〇年前になると九州地方から関東地方にかけて野岳・休場型細石刃核に代表される稜柱形細石刃核をもつ細石刃文化が展開する。この時期を代表する遺跡が、野岳・休場型細石刃核の標式遺跡となっている野岳遺跡である。考古学の世界では発掘された資料をもとに型式分類の基準を作成するのが一般的であるが、野岳遺跡は発掘された資料ではない。それにもかかわらずここまで人口に膾炙する遺跡になり得た理由はどこにあるのだろうか。

一 井手寿謙と野岳遺跡

東彼杵町木場郷に所在する日蓮宗の本地寺は、麓から急な山道を登った高原状の地形、標高二一〇メートルの高所にある。

寺からの眺望は素晴らしく、晴れた日には対岸の西彼杵半島が手に届くようである。この寺の入り口の石段の脇に「井手壽謙上人顕彰碑」が建てられている。碑の別面には「西日本旧石器研究の草分け」と刻まれている。

井手壽謙は、明治四十一年（一九〇八）年三月二十八日北松浦郡江迎町に生まれた。大正九年（一九二〇）父寿峰の本地寺住職就任に伴い東彼杵町木場郷に転居した。大正十三年（一九二四）

年旧制大村中学校に入学した一六歳のとき、東彼杵町里郷串島石棺群の発掘調査を見学した際、調査担当の東京大学（当時は東京帝国大学）黒板勝美教授に話を聞く機会があり、考古学に興味をもつようになったらしい。大村中学校在学中には「石器」の収集を始め、級友から「石狂人」と称されるほどであったという¹⁾。昭和五年（一九三〇）頃長崎考古学会の重鎮である津田繁二に師事している。津田が著した「我が長崎県の先史時代及び原始時代の遺跡・遺物の概略に就いて」（一九四〇）には大村周辺の先史時代の遺跡として、東彼杵郡の項に「松原村野岳郷（遺物散布地）石鏃、嬉野式石匙、弥生式土器、石鏃」と記載されている。これが恐らく井手の採集した野岳遺跡のことを意味するものと思われる。

「石狂人」と称された井手は、しかし単なる古物趣味の好事家などではなく、考古学研究者として、当時の中央学会の情報にも精通していたらしい。それを物語るものが大村市立図書館にある。井手の蔵書が「井手文庫」として寄贈されているが、そのなかに戦前ヨーロッパの旧石器を日本に紹介していた大山 柏の著した『考古学講座』欧州旧石器時代・欧州新石器時代、『史前人工遺物分類 第一編 石器』などがみられることから、先史時代の石器について本格的に研究していたことが推察される。

戦時中のエピソードを示す資料が東彼杵町歴史民俗資料館に展示されている。出



写真1-3 井手壽謙 38歳
(井手果氏提供)



写真1-2 井手壽謙上人顕彰碑
(東彼杵町 日蓮宗本地寺提供)

二 芹澤長介と野岳遺跡の邂逅

日本の旧石器時代研究の先鞭をつけた岩宿遺跡の発見から一〇年後の昭和三十四年（一九五九）春、芹澤は、旧石器文化の広がりを確認するため、九州地方巡見の旅に出る。途中で合流した鎌木義昌と芹澤両名は、博多、唐津、長崎、雲仙、



写真1-4 野岳遺跡近景

この石器にまつわる話は極めて興趣に富んでいる。

土不詳とされている縄文時代大珠がそれである。その来歴をひもといてみると、井手が先の大戦で従軍した際、配属先の茨城県阿見町で防火用水の池を掘った時に偶然掘り出したものを上官の許可を得て持ち帰ったものらしい。硬玉製の優品である。

さて本地寺の碑文に刻まれた「西日本旧石器研究の草分け」とはどういうことであろうか。それは野岳遺跡の発見にまつわる話である。野岳湖は大村市の北部、東野岳町にある江戸時代に造られた人造湖である。周囲約三キロメートル、夏は多くのキャンプ客でにぎわう。遺跡は、中央サイトキャンプ場あたりで、今でも黒曜石の削片などを採集できる。この遺跡で井手は、三〇点を超える細石刃核を採集している。それらは非常にまとまりのある石器群で、細石刃核の素材には遺跡から十数キロメートル離れた佐世保市針尾島の牛ノ岳に産出する淀姫系黒曜石を使用しており、風化面は青灰色になる。井手はこの細石刃核について謙遜しながら次のように述べている。「石核は一見まことにつまらぬものですが、これは貴重な考古学資料であります」と。

島原、鳥栖、熊本、山鹿、鹿兒島、宮崎、別府と九州一周の調査を精力的に行った。その旅の終わりころ、佐世保市の佐世保市文化館に旧石器の遺物が展示されていることを聞き及んだ二人は別府から佐世保へと急行した。芹澤は、展示品の長崎県東彼杵郡東彼杵町木場郷の本地寺住職井手寿謙が出品した細石刃と細石刃核に注目し、二人は早速千綿へと移動し、井手の元を訪れたのである。

芹澤は岩波新書シリーズの一冊として『日本旧石器時代』を著している。書中の「九州への旅」という一節に「千綿の山寺」という項がある。押さえ気味の記述ではあるが、芹澤の興奮が伝わってくるような書き振りである。長くなるが引用してみたい。

大村線の千綿駅で下車し、駅員に、本地寺へ行きたいのだがどこにあるかを訊ねてみると、駅から約六^{キロメ}離れた山の上にあることが判った。しかし雨が激しく降ってきた上に、千綿付近にはタクシーも全くないという。窮余の一策として、付近の家から小型トラックを出してもらい、助手席に乗り込んで出発した。土砂降りの雨の中、石ころと泥の坂道を登ること約三〇分、鬱蒼とした木立の中に濡れて光る本地寺の石段の前に着いた時はすでに夕暮れであった。

石段を登り切ると、古い歴史を秘めている感じの本堂が見えてきた。左手の墓地には二〇数基の代々の住職のものと思われる苔むした石塔が雨に打たれて並んでいた。庫裏にまわって来意を告げると住職がにこやかに迎えてくれた。ちょうど寺の行事の慰霊祭が終わったところだという。奥に通されてから、佐世保文化館に出品してあった細石器の関連資料をみたいと申し出ると、住職は別の室から箱に入れてきちんと整理された石器類を出して来られた。それらはすべて旧石器であって、細石刃、細石刃核、ナイフ、彫刻刀、尖頭器などのあらゆる器種がそろっており、住職が東彼杵郡の各地をたんねんに歩いて採集されたものだという。しかも驚いたことには、これらの旧石器の採集は、二〇年も前から続けられていたもので、すでに何人かの考古学者に見せたことがあったが、誰も特別の注意を払ってくれなかったそうである。もしも、これらの資料が一九三〇年代あるいは四〇年代のはじめに研究者の誰かによって注目されていたなら、岩宿の発見を俟たずして、日本の旧石器時代研究は着手されていたことであつたらう。

私たち（芹澤・鎌木）が興奮しながらそれらの石器を見ている時、住職は一冊の本を取り出し出してきた。それは当時出版されて間もない私の著書「無土器文化」であった。永年採集を続けてきた石器を理解するために、つい数日前に長崎市まで出かけて購入してみたのだという。

既に長野県矢出川遺跡で細石器文化の検出に成功していた芹澤は、野岳遺跡の価値を即座に認識したのである。後日、東北大学の学生とともに本地寺を再訪した芹澤は、井手を帯同して野岳遺跡に赴き、将来の発掘地点を決められたそうであるが残念ながらその機会が訪れることはなかった。

文中に登場する『無土器文化』が大村市立図書館の井手文庫におさめられている。見返しのページを開いてみると芹澤の自筆の署名があった。

昭和三四年四月十三日

九州に細石器を尋ねての途次

芹澤 長介

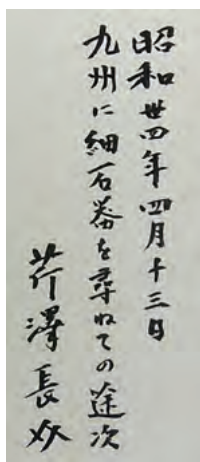


写真1-5 芹澤長介氏署名

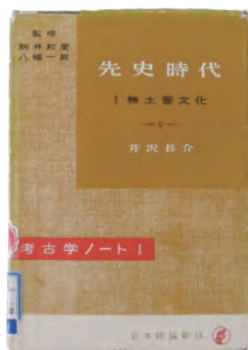


写真1-6 『考古学ノート I』
(日本評論社『先史時代 I 無土器文化』より)

墨痕鮮やかな芹澤の署名は達筆であった。その文面からは、細石器を求めて九州を旅し、ついに野岳遺跡に巡り会えたという芹澤の興奮が読み取れるようである。

芹澤がいうように井手の野岳遺跡での採集作業は戦前から行われていたことは明白である。井手は「大村史談」に野岳遺跡の石器をめぐって京都大学の樋口隆康教授と三時間にわたって論争したと記している²。意見は対立したままで、教授の目を引くことなく終わったのはかえすがえす残念である。この論争は、岩宿の発見以前の戦後間もない昭和二十一年（一九四六）であり、正当な評価がなされておれば「岩宿の発見」ならぬ「野岳の発見」ということもありえたかもしれない。ここにも隠れた「岩宿の発見」が潜んでいた。

◆ 鈴木忠司と野岳遺跡

ここでもう一人野岳遺跡にとって重要な役回りをする人物に登場願おう。鈴木忠司である。

芹澤・鎌木が注目した野岳遺跡の細石刃石器群を一躍全国区に昇進させたのが鈴木忠司である。鈴木は明治大学在学中、佐賀県原遺跡の発掘調査に参加した。調査終了後、河出書房新社『日本の考古学Ⅰ 先土器時代』に記載されていた「遠目遺跡」の資料を実見するため本地寺に井手を訪ねたのである。

そこで目にしたのが野岳の細石器であった。この重大さを認識した鈴木はすぐに実測を申し入れ、了承を得るとその後幾度となく本地寺を訪れ、実測を行っている。鈴木の記事によるとその回数なんと一〇数回にも及んでいる。当時鈴木は本地寺詣でに同行し、実測を手伝った平ノ内幸治によると、ふもとから急な山道を一時間ほど登りつめ、ようやく寺にたどり着くとまず井手が庫裏から書物を取り出して鈴木を質問攻めにしたらしい。それが終わるとようやく実測できたとのことであった。当時の鈴木が書いた実測図が残されている。それはクリーム色の無地のケント紙に精細な線で表現されていた。こうした本地寺詣でが実を結ぶ時がきた。鈴木は労作である「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」（一九七一）という論文を上梓した。この論文は、今日でも細石刃文化研究において必携の論文である。その優れた視点は、



写真1-7 『古代文化』
 (財団法人古代学協会『古代文化』
 第23巻8号より)

当時明らかになっていた長野県矢出川遺跡や静岡県休場遺跡など
 西南日本に展開する稜柱形細石刃核を「野岳・休場型細石刃核」
 という名称を与えて北方系の削片系細石刃核と対峙する姿を鮮明
 にしたことにある。それは小林達雄が提唱したシステムA・B論とは
 似て非なるもので、遺跡名を冠した「野岳・休場型」なる細石刃
 核は瞬く間に研究者に広がっていったのである。今日細石器文化
 研究を志す学者にとって誰一人として避けて通ることはできないも
 のになった。

また鈴木は、大学院卒業後京都の名門平安博物館に奉職してからも足繁く本地寺を訪問しており、それが契機となつて野岳遺跡の資料の一部が平安博物館で展示されることになったらしい。平安博物館は、京都中京区三条高倉にある旧日銀京都支店で重厚なレンガ造りの建物でそれ自体が重要文化財であり、現在は京都文化博物館の別館になっている。昭和四〇年代からしばらくの間、その薄暗い展示室の一角で「野岳遺跡」の細石刃核は確かに異彩を放っていたのである。

四 野岳遺跡の今日的評価

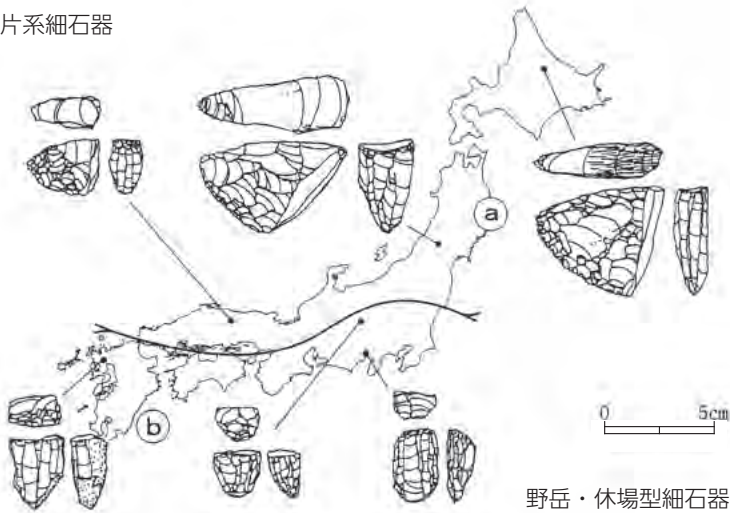
芹澤らによる「野岳の再発見」以来、野岳遺跡の学会への情報伝達は、本地寺訪問後すぐに鎌木によってなされた。鎌木は「細石器問題の進展(三)」（一九五九）に記載されたのを始めとして、翌六〇年には芹澤が『石器時代の日本』において野岳遺跡の細石刃核一点の実測図を紹介しているが、不思議なことに「野岳遺跡」の名称は使われていない。野岳遺跡の名称が最初に登場するのは、鎌木義昌・間壁忠彦による「九州地方の先石器文化」（一九六五）においてである。鎌木・間壁は野岳遺跡の細石刃核を「半円錐形で打面調整のある非常にとのつた感じの細石核…中略…石質も北九州における一般の細石器とは異なり、普通の黒曜石でなく、安山岩に似たグラスシーなもの」と述べ、野岳遺跡と福井洞穴二・三層との違いを

明らかにした。麻生 優は同書に「細石器文化」という論文を著し、日本の細石器文化の集大成を行った。麻生は、九州地方の細石器編年を当時唯一層的な出土例であった福井洞穴の成果と細石刃核の技術的・形態的特徴を元に、半円錐形→円錐形→半舟底状→舟底状という変遷を提示し、野岳遺跡の資料を円錐形の代表として位置づけた。

野岳遺跡が細石器文化研究の中で何故こも高く評価されるのであろうか。その理由としては資料の一括性ということがあげられる。表採資料でありながらほとんど他時期の資料を含んでおらず、多くの細石刃核・細石刃の斉一性が高いことが指摘できる。すなわち素材となる原石が淀姫産の黒曜石であることや大型であることなどである。

野岳・休場型の編年的位置を九州地方の細石器文化の出現期(最古期)におくことは学会の共通理解である。ではその出自はどうか。萩原博文は、ナイフ形石器文化最終末段階における石器の小形化指向、形態的統一、組合わせ具の開発という基本的構造が細石刃石器群の出現に深く関与するとして、細石刃石器群の自生説を主張している③。萩原は、出現期の細石刃核を扁平な位牌塔型・茶園型に求め、それがナイフ形石器群の磯道型石核と共通点をもつと

削片系細石器



野岳・休場型細石器

図1-10 野岳・休場型と削片系細石器 (安森 (2010) 改変)

する。これに対し佐藤宏之は、東アジア的視点に立つて細石器文化の伝播を論じている。佐藤は、稜柱型(野岳・休場型)の起源についての明言は避けるが、中国華北地方に分布の中心があることからその地域からの到来と予想している。つまり西回廊(日本と大陸を結ぶ連絡路)を通じて古本州島西端に入り、太平洋沿いに関東地方までの西南日本に拡散したとする(4)。一方、北方起源の削片系細石器文化の一群は、北海道から東北地方へと進出し、日本海沿いに南下して岡山県恩原遺跡まで行き着くが九州地方へ入ることはなかった。近年注目すべき遺跡が調査された。群馬県みどり市馬見岡遺跡がそれで、信州産黒曜石でつくられた二点の野岳・休場型細石刃核と珪質岩系石材でつくられた削片系細石刃核に伴う削片が同一のブロックから出土している。まさに南北二系統の細石刃石器群の遭遇である。これをどうみるかは意見の分かれるところであろうが、少なくとも両者が同時期に存在したことは事実であろう。関東地方で従来いわれてきた野岳・休場型→ホロカ型→湧別(削片)系という編年観に一石を投じるものである。

五 大村湾地域の細石刃石器群

■一・大村湾東岸の細石刃石器群

野岳遺跡では総数三〇点を超える細石刃核と大量の細石刃が採集されている。そのうち大村市立史料館及び長崎純心大学博物館に所蔵されている各一点を除いた残りの資料は井手寿謙の採集品で、東彼杵町歴史民俗資料館に寄贈され、その一部が展示されている。

細石刃核及び細石刃と安山岩製の大形削器それに石槍なども採集されているが、石槍は形態からみて細石器に伴うものとは考えられない。ほぼ単純な組成で、そのあり方は大分県亀石山遺跡の様に類似する。細石刃核に用いられる石材はすべて淀姫系黒曜石に限定され、四〜六センチ大の亜角礫を素材とする。石材利用において特定石材に依存する遺跡のあり方から遊動生活をしていた野岳人の活動の痕跡が読み取れる。野岳遺跡から淀姫系黒曜石の原産地(針尾島牛ノ岳)までは直線距離で一〇数キロと近いことから石器石材の獲得は直接採取したことが容易に想定できる。この時期の大村湾周辺

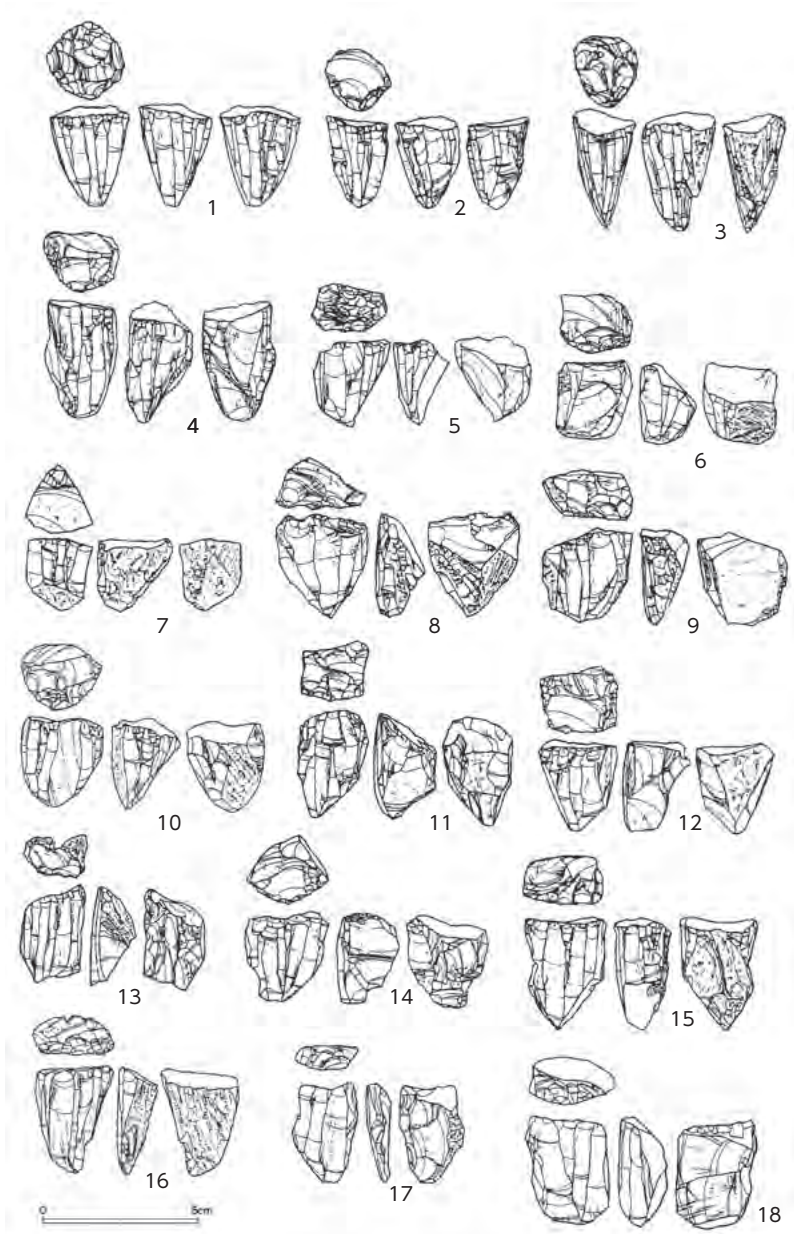


図1-11 野岳遺跡の細石刃核

の遺跡の石材獲得状況をみると比率の多寡はあるものの腰岳・牟田系黒曜石を主要な石材としている。そうした石材環境下で何故野岳遺跡のみが淀姫系に限定されるのであろうか。その背景として野岳遺跡の存続期間が非常に短期間の一過性のものであった可能性が高い。しかも細石刃核と細石刃を大量に保有し、ほとんど他器種を持たないことから細石刃の生産に特化した遺跡といえる。また素材となる淀姫系黒曜石の形状は残された礫面からみてそれらが同一地点で獲得したことが想定できる。

鈴木忠司は野岳遺跡の細石刃核をA～Cの三グループに分けた。Aグループ(図11の1)は典型的な円錐形を呈するもので、細石刃剥離が全周する。打面は、平坦打面で丁寧な打面調整が施されている。一例のみであり、野岳遺跡を代表するものではない。Bグループ(第11の2・3)は、形状は円錐形を呈するものの細石刃の剥離作業が全周せず、部分的に剥離面若しくは礫面となるもので、したがって打面調整も細石刃剥離が行われる部分に限定される。Aグループへの移行段階ととらえられる。Cグループとしてその他の細石刃核をあてる。

いわゆる角柱状(稜柱状)をなすもので野岳遺跡の主体となるものである。打面の上面観が三角形若しくは四角形をなし、急角度の打面となる。細石刃の剥離作業面は幅広の一面になることが多い。鈴木はCグループを野岳遺跡の本来の姿としている。

細石刃の製作技術については模式的な工程図(図12)が提示されている。第一段階は、母形の形成である。原石である角礫又は円礫の黒曜石に水平方向から打面形成を施した後、垂直方向からの大まかな剥離によって体形を角柱状に整える。出来上がる母形は傾斜打面とほぼ平行する二面からなる側面をもつ。第二段階は、細石刃を剥離する工程である。まず細石刃剥離のために細かな打面調整が傾斜する打面の上部に施された後、細石刃剥離作業が行われ、大量の細石刃が生産される。この段階の作業は、打面の再生をくりかえすことによって何度も更新される。

Cグループの細石刃核には、形状が角柱状とは異なる扁平なものがあることが指摘されていた。それは当初、細石刃の剥離作業が進行した結果と考えられていたが、研究の進展によって、母形の形成段階から扁平になることを意識して製作した

ものであり、またその背面のあり方の違いから二型式あることが分かった。位牌塔型(図1-11の19・20)は、背面に横方向の剝離を施したもので、背面の平坦化を企図したものと考えられる。これに対し茶園型(図1-11の18)は、背面を平坦な礫面で構成している。

大村湾東岸では、野岳遺跡を除けば良好な野岳・休場型が出土する遺跡は少ない。そのなかにあって大村市の北部に所在する寿古遺跡から、一点の野岳・休場型

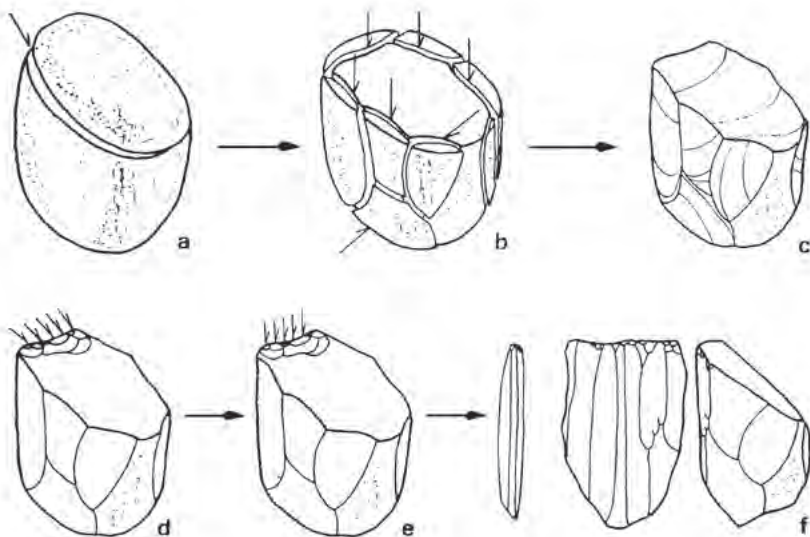


図1-12 野岳・休場型の製作工程
(財団法人古代学協会『古代文化』第23巻8号 鈴木忠司(1971)より)

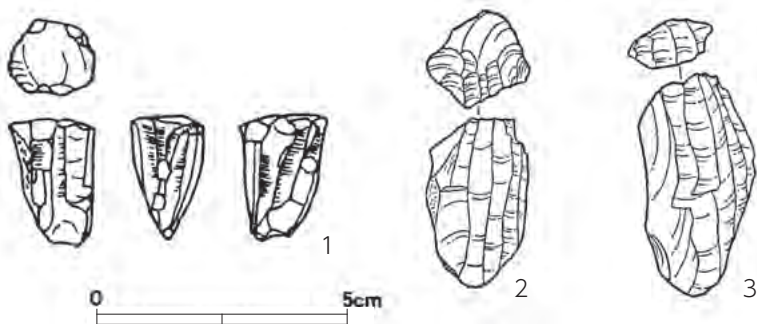


図1-13 大村湾東岸の細石器

〔図1-13の1〕とみられる細石刃核が、小振りて打面は水平にちかい単打面であり、調整はほとんどみられない。

東彼杵町遠目遺跡でも二点の資料が紹介されている。報告によればナイフ形石器の上層から出土したという。野岳・休場型〔図1-13の2〕と扁平な茶園型若しくは位牌塔型〔図1-13の3〕と推測される。石材は、乳白色の黒曜石と報告されていることから佐賀県嬉野市椎葉川若しくは針尾島古里海岸の黒曜石の可能性が高い。

■二、大村湾南岸の細石刃石器群

Ⅲa期の細石刃石器群

諫早市鷹野遺跡A地点から、この時期の細石器が出土している。〔図1-14の28〕はやや大きめの細石刃核で、素材は淀姫系黒曜石である。細石刃剝離作業面が正面に集約されている。打面は水平で丁寧な調整が施される。〔図1-14の29〕は位牌塔型である。打面調整が丁寧な面に施されている。素材は腰岳・牟田系である。位牌塔型のプランクは、側面の調整が雑で一部に礫面を残しており、細石刃剝離作業は行われていない。また遺跡からは多数の細石刃が出土しており、頭部〔図1-14の32〕、中間部〔図1-14の30・31・41〕、尾部〔図1-14の45〕に区分している。

細石刃核の点数に比較して細石刃の量が圧倒的に多い出土状況は、この時期を代表する大分県天ヶ瀬町亀石山遺跡に極めて似ており、細石刃の生産拠点としての性格をもった遺跡といえよう。また細石刃は、軸に埋め込む際の刃部の直線性を重視するとされており、長めの細石刃を分割し、より直線的な中間部が多く消費されたと考えられるが、実際に出土した点数では最も多かった。その要因は不明である。細石刃の折断面接合が六例検出されたことも稀有なことである。特筆すべきこととして、炉跡が検出されていることがあげられる。Ⅲ層直下にある水平な板状砂岩の上に拳大の玄武岩礫を乗せる形で、礫は火熱を受けて赤変しており、炭化物が集中して検出されたことから炉として使用されたことは確実であろう。この時期の遺構の検出は珍しく、炉跡が確認されているのは茶園遺跡V層に認められる程度である。

西輪久道遺跡の野岳・休場型細石刃核は、牟田産の黒曜石円礫を素材としており、細石刃剝離作業面がやや幅広となる。背面に自然面を取り込むことが一般的で、打面は傾斜するものが多い。扁平な茶園型もみられることからⅢa期



図1-14 大村湾南岸の細石器(上・下段:西輪久道遺跡、中段:鹿野遺跡)

でもより古い時期設定が可能である。細石刃は総数で三四八点出土している。石材別では、鷹野遺跡とは異なり腰岳・牟田系が最も多い。部位別の遺存率では中間部が最も高く、次いで頭部、尾部の順となる。

Ⅲb期の細石刃石器群

この地域のⅢb期は、西輪久道遺跡から出土した船野型細石刃核に代表される。遺跡からは船野型細石刃核二点、ブランク一点が出土している。細石刃核は、断面がU字形を呈し、打面側から下端へ向かつて調整剥離が施される。細石刃剥離作業面が一端に用意され、短めの細石刃を生産している。ずんぐりした印象の形態からみて古相の船野型と思われる。西輪久道遺跡では野岳・休場型と混在しており、層位的に分離できないが、型式学的に船野型が後出することが知られている。

註

- (1) 井手寿謙「私の趣味」『玖城』第二四号 長崎県立大村中学校 一九二七
- (2) 井手寿謙「考古学上より見たる大村地方の遺物について」『大村史談』第七号 大村史談会 一九七二
- (3) 萩原博文「第二章 平戸の旧石器時代」『平戸市史 自然・考古編』平戸市 一九九五
- (4) 佐藤宏之「環日本海地域における細石刃石器群の伝播と構造変動」『東京大学公開シンポジウム予稿集』東京大学 二〇〇八

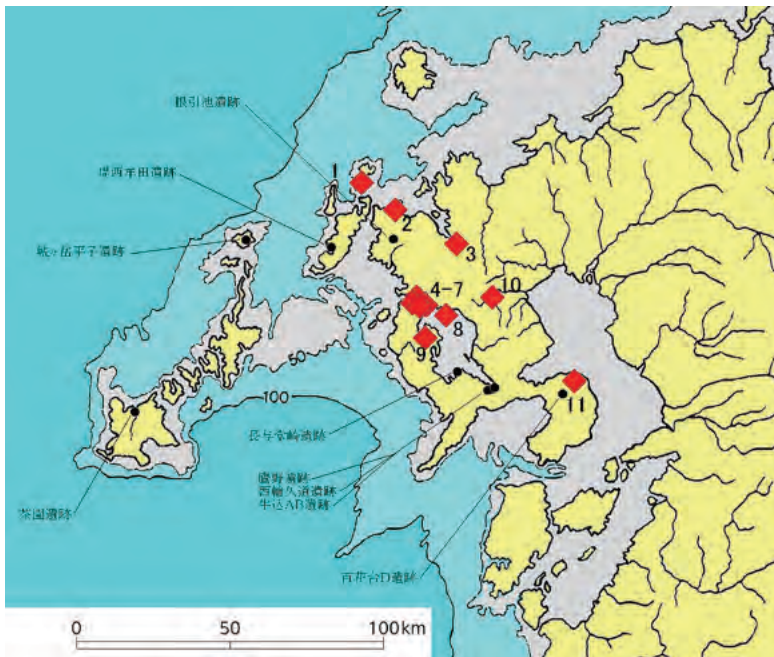
第四節 古大村盆地をめぐる旧石器文化

石器製作技術は、人類が最初に手にした先進技術であった。狩猟採集生活をおくる旧石器時代人にとって、石器の原材料となる石材を確保することは至上命題である。しかし石であれば何でもいいかというところではない。狩猟具となるナイフ形石器や台形石器などには、鋭利な割れ口のできる黒曜石や安山岩などのガラス質石材が必要である。また黒曜石、安山岩はどこでも採れるわけではない。原産地は限られており、黒曜石などは二〇〇^キメートルを超えて移動をするものもある。

旧石器時代人にとって石材獲得戦略は極めて重要であった(1)。

◆ 黒曜石

黒曜石(黒耀石ともいう)はガラス質火山岩で、岩石学的には流紋岩→デイサイトに属する岩石である。溶岩が急冷してできるもので、流紋岩や火砕流堆積物の中にみられるのが一般的である。割れ口(断面)の色調は、その名のとおり黒色を呈するものがほとんどだが、溶岩に含まれる元素によってさまざまに変化する。黒曜石といえながら乳白色になるもの、青灰色を帯びるもの、赤いものという具合である。石器の素材として格好の材料であったため、旧石器時代から盛んに使用されてきた。長崎県を含む西北九州は日本有数の原産地密集地帯で、佐賀県伊万里市腰岳、松浦市牟田、佐世保市針尾島など数多くの産地を有する。



1中山 2牟田 3腰岳 4淀姫 5牛ノ岳
6小鯛 7古里 8大崎 9亀岳 10椎葉川 11大三東
図1-15 黒曜石原産地

二 主な黒曜石原石の産状と形質

■一、腰岳・牟田系黒曜石

腰岳・牟田系黒曜石は、断面が漆黒色になる良質の黒曜石の総称として用いる。佐賀県伊万里市の腰岳と松浦市の牟田を合わせた名称である。両者は礫面が残っている場合には判別が容易である。腰岳産は角礫を呈しており、白斑などの不純物が混じることもある。牟田産は、礫面の凹凸は少なく平滑である。鶏卵大から拳大のやや扁平な円礫が多い。礫面が残っていない場合の肉眼による判別は困難で、事実、蛍光エックス線分析では両者は同一という結果が出ている。

■二、淀姫系黒曜石

淀姫系は、断面が鈍い青灰色を呈しており透明感はない。風化すると青灰色が強くなり、他の黒曜石との分別は容易である。当初黒曜石とはみられず、ハリ質安山岩と称されたこともあった。良質で石器製作には好適であり、佐世保市泉福寺洞穴では盛んに用いられている。もともと下川達彌によって学会に報告された佐世保市東浜淀姫神社がその産地として知られていたが、本来の給源は淀姫の対岸にあたる針尾島の牛ノ岳である。近くに土器田池がありその付近でも採集できることから土器田産と称されることもあるが、学史的意義を考慮して淀姫系と称する。

■三、古里海岸系黒曜石

針尾島東岸の古里海岸で干潮時に採集できる黒曜石である。角礫状で大きいものは一〇センチを超える。断面はスリガラス状の乳白色で透明感はない。古里海岸では漆黒色のものも採集できることから二次堆積と考えられている。佐賀県嬉野市椎葉川産と極めて似ており、肉眼による識別は困難である。同じ針尾島の小鯛では乳白色を呈する黒曜石を採集できる。径四〜五センチの扁平な円礫で、断面は透明感のないスリガラス状の乳白色で黒い縞模様が入ることから容易に識別できる。

■四、亀岳産黒曜石

西海市西彼町上岳郷・中山郷・亀浦郷にかけて亀浦流紋岩の中に亜角礫状の黒曜石を産出する。学史的には亀岳産黒曜石として知られており、ここではそれにならう。量的にも豊富に産出し、サイズも大きめのものが多い。断面の透明感

はないがすべすべとしており、色調は暗いモスグリーンで他産地のものとは容易に識別できる。

三 石材獲得戦略

石材獲得戦略については、いくつかのモデルが提示されている。異なる集団間で石材が「交換」されるという考え方や集団が原産地に赴く「直接採取」という考え方が一般的である。これに対しアメリカのルイス・ビンフォードは、アラスカ原住民のヌナミウト族の民俗誌から「埋め込み戦略」を提唱した。これによるとヌナミウト族は遊動生活の途中で石材を獲得するのであり、石材獲得だけを目的とした行動は行わないとした^②。

黒曜石を直接採取した例として伊豆七島の一つ神津島産黒曜石があげられる。この島の黒曜石は、四万年前から関東地方で用いられたことが蛍光エックス線分析によって確認されている。神津島と伊豆半島との間は海が深く、氷期でも陸化しない。そこには神津島の黒曜石をターゲットにした航海による直接採取が考えられる^③。

旧石器時代の石器石材研究は今日の問題である。関東地方では、黒曜石の蛍光エックス線分析をはじめ各種石材の産地分析がさかんに行われており、石材獲得のモデルが構築されつつある。千葉県の下総台地を舞台に研究を続ける田村隆は、そこで使用されるガラス質安山岩・黒曜石などの石材が二〇〇^{キロメートル}の範囲に広がる五つのギャザリングゾーン（資源採集域）に分布しており、下総台地と北関東を結ぶ遊動回廊ができた指摘する^④。いま最も活躍している研究者の一人である堤隆は、関東一円の石材需給システムを分かりやすく説明している。また北海道の著名な黒曜石原産地である白滝産の原石は、木村英明らの研究によって、北海道一円はおろか三〇〇^{キロメートル}以上離れたカムチャッカ半島まで流通していることが明らかとなった。まさに「白滝ブランド」の面目躍如というところであろう^⑤。

九州地方の旧石器時代遺跡の原産地分析は最近増加しているとはいえず、関東地方に比べてまだまだ十分とはいえず、九州全体を見とおした石材獲得戦略を描けるところまでは至っていない。しかしこと西北九州地方に限ってみると、旧石器時代を通して腰岳・牟田系と淀姫系という二大原産地の黒曜石が主体的に使用されており、両者がブランド化されていたとい

える。

◆ 大村湾周辺地域の石材獲得戦略の時代的変遷

長崎県内のナイフ形石器文化期の石材の獲得状況 図1-16、図1-17、図1-18 をみると、五島市の茶園遺跡Ⅵ層や平戸市南部の堤西牟田遺跡第Ⅱ文化では腰岳・牟田系の比率が低く、淀姫系に大きく依存していることが分かる。萩原博文は『平戸市史 自然・考古編』において、西北九州の旧石器時代遺跡の石材環境と集団関係について詳述している。それによると、石材供給関係に大きな変化が現れるのはナイフ形石器文化の中期で、ガラス質安山岩の増加と腰岳・牟田系黒曜石の割合の低下がみられるとし、その主な要因を剥片尖頭器・角錐状石器の製作に係わるとした。またこうした変化は原産地からの距離にも関係するとし、原産地に近いう度島・平戸北部ではナイフ形石器文化期を通じて腰岳・牟田系黒色黒曜石が多用されるのに対し、平戸市中南部では地域的・时期的に石材供給関係が大きく変化するという。こうした現象を萩原は単位集団の行動領域の違いと考えている。

原産地から遠く離れた島原半島の百花台遺跡群の状況をみてみる。県の調査した百花台D遺跡Ⅴ層では、石材の多様化が指摘できる。腰岳・牟田系は五割に満たず、淀姫系の割合も低い。一方安山岩の比率は群を抜いて高い。また少数ではあるが熊本県阿蘇の象ヶ鼻産や鹿児島県出水市の日東産の黒曜石のような遠隔地石材が存在する。同志社大学が調査した百花台東遺跡は、百花台D遺跡Ⅴ層とほぼ同時期の遺跡で、石材環境もほぼ同様であり、遠隔地石材として南九州の鹿児島県上牛鼻産、日東産の黒曜石やシルト質頁岩などが認められている。

大村湾周辺地区は、その北部に針尾島の黒曜石原産地が控えており、あわせて大村湾の旧地形が盆地であり、古大村川が現在の針尾瀬戸を通っていたことが想定されているので、この地域では河川沿いに針尾の原産地まで容易に行けたと思われる。湾奥からでもその距離は四〇^キメートル程度である。また松浦市牟田までの距離は湾奥から約七〇^キメートルである。こうした地理的条件にある本地域の石材獲得は、腰岳・牟田系を主体とする点では遺跡近傍に原産地を有する県北・平戸北部と

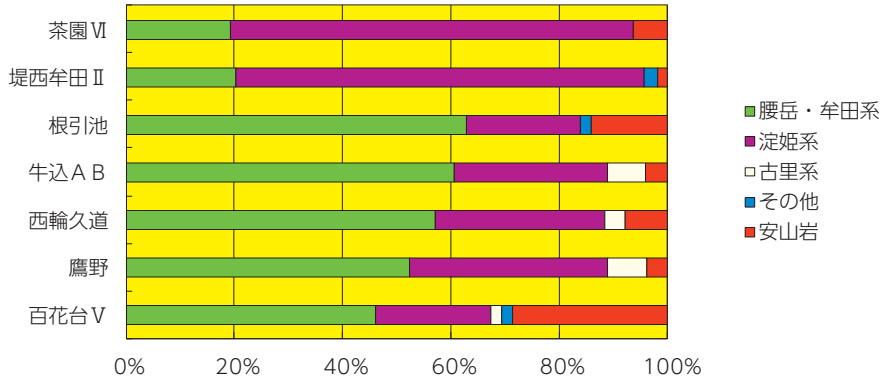


図1-16 ナイフ形石器群の石材比率

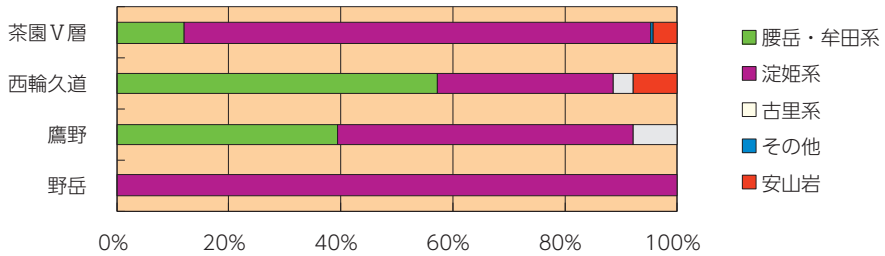


図1-17 細石刃石器群の石材比率

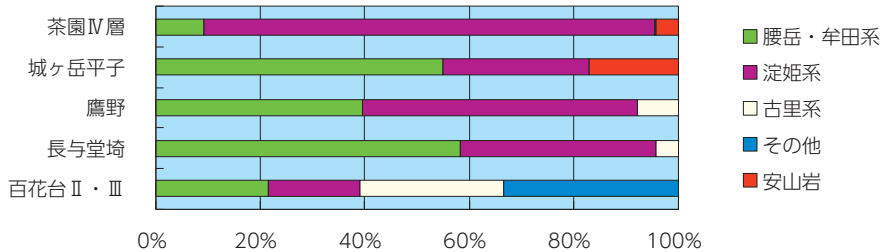


図1-18 縄文時代草創期後半石器群の石材比率

ほぼ同様である。しかしその比率は県北地域に比べて低く、代わって淀姫系の割合がより高くなる傾向にある。また県北地域ではほとんど出土しない乳白色の古里系が少数ながら組成される。このことから針尾島周辺の原産地に依存する割合が高いと評価できる。

旧石器時代終末の細石刃石器群段階においてもこのような基本的な枠組みが踏襲される。五島列島の茶園遺跡Ⅴ層では若干ではあるが淀姫系の比率が高くなる。大村湾周辺の西輪久道遺跡、鷹野遺跡でも同様の傾向が認められる。特異なのは野岳遺跡である。細石器関係資料のほとんどすべてを淀姫系に頼るあり方は他に例がない。

西北九州では、旧石器時代のナイフ形石器群から細石刃石器群を通して、石材獲得環境には大きな変化はなかった。大きな変化が生じるのは、縄文時代草創期後半の爪形文土器段階以降である。この時期には、従来と同じ石材環境を保持する遺跡と、それが崩壊して新しい産地開拓へと向かった遺跡という二通りの石材獲得戦略に区分される。前者の例としては泉福寺洞穴、福井洞穴といった比較的産地に近い遺跡のほか五島列島の茶園遺跡などがあげられる。後者には五島列島北端の城ヶ岳平子遺跡・島原半島の百花台遺跡などがある⁶⁾。

石材獲得戦略が大きく変化する要因を考えてみよう。約一二〇〇年前縄文時代草創期後半の爪形文土器段階になると隆線文土器段階が寒冷な気候だったのに対し急速に温暖化する。海面はマイナス五〇センチにまで上昇し、九州本土と五島が切り離される。東シナ海から玄界灘に面した地域は海岸線の前進によって行動領域の縮小を余儀なくされた。この地域を行動領域としていた集団関係は崩壊したものと思われる。この環境の激変に対して当時の細石刃狩猟民は様々な対応策を講じる。泉福寺洞穴六・五層のように長めの細石刃生産に移行したり、城ヶ岳平子遺跡・百花台遺跡のように腰岳・牟田系、淀姫系の安定供給が途切れ、新しい小礫黒曜石の産地開拓に向かった遺跡では、生産する細石刃の量を確保するため大量の細石刃核が用意された。また茶園遺跡Ⅳ層や宮崎県の阿蘇原上遺跡にみられるように石槍・石鏃という縄文時代的な石器を新たに装備するなど多様な適応戦略の選択を余儀なくされたのであろう。

また別の視点からとらえれば、草創期前半の豆粒文土器・隆線文土器段階の拠点遺跡が泉福寺洞穴・福井洞穴などの洞

穴遺跡に限定されているのに対し、後半段階になると拠点の洞穴遺跡は維持されるものの、新たに開地遺跡の拠点化が進行する。その位置は洞穴から遠く離れた島嶼部の城ヶ岳平子遺跡、島原半島の伊古遺跡・百花台遺跡などが代表的である。県外に目を移すと福岡県春日市の門田遺跡も同じような遺跡である。自然環境の変化は石材獲得のみならず遺跡の立地環境にも影響した。

(川道 寛)

註

- (1) 堤 隆『列島の考古学 旧石器時代』河出書房新社 二〇一一
- (2) 田村 隆『石器石材の需給と集団関係』講座 日本の考古学 2『旧石器時代 下』青木書店 二〇一〇
- (3) 堤 隆『旧石器時代ガイドブック』遺跡を学ぶ別冊02 新泉社 二〇〇九
- (4) 田村 隆『旧石器社会と日本民俗の基層』同成社 二〇一一
- (5) 木村英明『北の黒曜石の道・白滝遺跡群』新泉社 二〇〇五
- (6) 川道 寛『西北九州細石器文化終末期の石材獲得』『九州旧石器』第一四号 九州旧石器文化研究会 二〇一一